

第三部

パネルディスカッション

日本語版

1. 総評

石汝傑(熊本学園大学):

このような会議は二つの点で非常に有意義だと思います。まず、方言地理学の面で日本はすでに発達した国ですが、中国はまだ発展途上にあります。このような差異が出来たのは一つには歴史的要因がありますが、これは現在、曹志耘先生達のプロジェクトによって改善されつつあります。もう一つは、中国語と日本語という言語の特徴の違いが研究の違いを生んだ面がある。従って中国語方言学は、方言地理学の面で日本に学ぶべき点がたくさんあると思います。一つは、さきほどお二人の先生が紹介されたように、日本語の方言研究の成果。もう一つは、岩田礼、太田斎などによる方言地理学の方法による中国語方言の研究。これらは我々の今後の研究にとって一つのモデルになるはずです。

次に、中国語側では、曹先生が紹介されたビッグプロジェクトは、中国方言学の研究にとって非常に重要な意義を持つものであり、また今後非常に大きな影響を与えるものです。中国語方言の研究の歴史においては非常に画期的な出来事です。私の希望を述べれば、日本の言語地理学では、特に方言資料を言語史の解釈に使うことが重視され、多くの成果が生み出されてきましたが、中国語の研究ではまだ緒についたばかりです。さきほど申し上げたように、岩田礼、太田斎などは多くの試行的研究をしていますが、中国の学者にとってはまだ始まったばかりの研究です。従って、曹先生たちのビッグプロジェクトについても、次のステップではさらに解釈の方に向かい、この方言地図集の意義をさらに大きなものとする必要があると思います。

2. マスメディアの影響

石汝傑:

次に趙日新先生の報告についてコメントします。中国で最近よく議論されているのは、どのように言語の宝庫としての方言を保護していくかということですが、都市においては多くの方言がすでに消滅の危機に瀕しています。農村の方言の現状については、中国人ですらまだよく理解していない現状であり、趙先生の報告は非常に興味のあるものですから、趙先生にはこのような研究を継続していただきたいと思います。趙先生の報告の中で、マスメディアの方言に対する影響という点に触れられていませんでした。その点について、お聞きしたいと思います。

趙日新:

さきほどは時間の関係でお話ができない点がありました。実際の所、中国農村の方言は大きく変化を始めていて、その際テレビ、ラジオなどのマスメディアが非常に大きな脅威を与えています。もう一つは、中学校、小学校の先生たちの標準語のレベルがかなり上がっています。そのため、農村地域であっても小学校の先生達が標準語で授業をし、小学生も標準語で話すという現象が出てきています。無論、このような現象が見られるのは、県

城(県庁所在地)においてで、周辺の農村部ではあまり見られないことです。しかし経済発展地域では、都市化の進行に伴って標準語の普及のレベルがますます高くなっています。したがって、方言の保存という観点からは楽観できない状況になっています。

大西拓一郎:

マスメディアの関係ですが、テレビ、ラジオの普及率というのはどんな感じでしょうか？どれくらいテレビを聴取しているのですか？

曹志耘:

100パーセントです。

大西拓一郎:

実は日本でも、共通語化を起こした非常に大きな原動力はテレビじゃないかと思います。学校教育の中で普及させようという努力はもちろんありましたが、それよりもテレビの力が遥かに強い。もう一つお伺いことがあります。普及率 100%ということですが、テレビはどれくらい理解されていますか？

石汝傑:

私の考えでは必ずしも 100%ではなく、地方によって違います。テレビがない所も確かにありますし、電波が届かないところもある。

曹志耘:

中国には“すべての村にラジオ、テレビを普及する”というプロジェクトがあり、ここ数年めざましいスピードで実施されています。100%というのはともかく、99%達成されているとあってよい。実施されて 10 年近くになりますが、確実に成果が上がっています。

大西拓一郎:

テレビの普及と同時に、そのメディアとどれだけ接しているかというのは大きいかと思っています。日本の場合、つけっぱなしの状態が多いと思います。四六時中、共通語を聴取することになる。これほど強力な言語教育マシンはありませんね。中国の状況はどうでしょうか？

石汝傑:

中国には以前から有線放送があり、無料ですからつけっぱなしでした。主に標準語の放送でした。テレビが普及してから、やはり日本と同じような状況があり、帰宅するとすぐにテレビをつける。電気代がかかるので、あまり長時間は見ませんが、普通、夜の仕事といえはやはりテレビを見ることです。

趙日新:

テレビを「見ることができる」、「聞いて分かる」ということと、「話せる」「話したい」というのは異なる問題だと思います。現在標準語を聞いて分かる人の比率がかなり高くなっていますので、意識的に“うまく話せる”と言うことがあるかもしれませんが、それと聞いて分かることとは違うのです。私も方言地区の出身ですが、小さいときから有線放送

聞いていて、大体分かるのですが話せない。片言なら話せますけど、話す気になれない。なぜか？話すとはかにされるからです。こういう意識の問題がある。

秋谷裕幸(愛媛大学):

私も受けた印象では、中国人のほうが日本人よりもテレビ好きだと。農村地域に行くと、ビデオ、DVD 借りてきて、それをずっと付けています。最近、中国人が夜更かしになったと感じています。方言調査で旅館に泊まるのですが、朝の7時半でも旅館の人がまだ起きてないというようなことがよくあります。

3. 『漢語方言地図集』について

中井幸比古(神戸市外国語大学):

曹先生のご発表で、調査項目に音韻項目がたくさん採用されていることに興味をもちました。日本の場合、明治時代に『音韻分布図』がありましたが、それ以外には音韻関係のものが非常に少ない。その一つの理由に、方言は研究しても、音声、特にアクセントはやらない人が多いことです。中国の場合、方言研究者はまず声調の研究をやらなければならない、或いはやることになっているのでしょうか？日本語の場合、地方の方言のアクセントの体系が十分に明らかになっていません。それは、短期間の調査では明らかにできないという事情もあります。

曹志耘:

中井先生、有難うございます。多くの原因があります。実の所、『漢語方言地図集』は、日本の言語地図だけでなく、ヨーロッパの言語地図とも異なるのです。ヨーロッパの言語地図にもあまり音韻項目がありませんね。語彙項目が主です。この点、日本と欧米の言語地図は一致しています。このような差異を生んだ原因は主に二つあります。一つは中国語自体の特徴で、中国語は漢字によって表記され、漢字の一つ一つに発音がある。もう一つは中国語研究の伝統として中古音の体系があり、研究者は誰でも『切韻』という辞書を知っており、中古音系を基礎に方言を研究しています。中古音と現代音の対応関係を探求することができます。それが多くの音声項目を設けた理由です。

司会:

中井先生は、日本ではアクセントを研究する人が少ないため、アクセントの地図を作成することができない、と言われました。

曹志耘:

日本言語地図調査の時には、言語学者ではない人も参加していると聞いておりますが、われわれの調査者はみんな厳格な訓練を受けた専門家です。ここにいらっしゃる石先生も調査者です。音声面での記述と研究にはなんの問題もありません。

4. 方言の変質

中井幸比古:

趙先生に質問です。日本では標準語の普及が進んでいますが、それで方言が消滅するのではなく、元々あった方言と標準語の中間的な形がよく報告されています。特に東北地方はずいぶん多いですが、例えば金沢方言で、お年寄りには“知らなかった”ということを「シラナンダ」といいますが、若い人は「シランカッタ」という。「シランカッタ」というのは標準語の“知らなかった”までいかないけれど、それに近づいている形です。このような例がたくさん報告されていますが、中国の方言も最近こういう現象はありますか？

趙日新:

かなり普遍的にあります。方言の多くの特徴が摩滅して標準語に近づいています。例えば同じ方言にも世代間の違いがあり、若年層の語彙は新しいものが多い。標準語と方言の混交形式もあります。

邢向東(中国・陝西師範大学):

西安方言の例を一つ挙げます。làoosi というのが方言の言い方で、先生という意味です。標準語は làoshi。最近出てきたのは làoshi というもので、子音・母音は標準語で、声調は方言のままという形が現れました。これは一種の融合現象です。

中井幸比古:

まず単語の形が標準語に近づいて、声調だけは方言が残りやすいのは中国もあるのでしょうか。日本語の場合に、共通語の影響は、子音と母音から始まって、その後でアクセントという順序になって、今私がしゃべっているのも関西弁の訛ったもので、共通語ではありません。アクセント以外の部分は大体標準語ですが、そんなスタイルは中国語でもあるのでしょうか？

邢向東:

例えば、陝西省の関中方言では声調の変化が最も遅く起きています。私の母語の陝西省北部方言でも同じです。出稼ぎに行った農民達が、家に戻ってきた時に、母音と子音は標準語になっていますが、声調はまだ故郷のものを残している。一番早く変わるのは語形です。

太田齋(神戸市外国語大学):

一つ例を付け加えますと、西北、西南の方言は指小辞のソリ舌音がなく、例えば標準語の「杯子」は「杯杯」と言われるはずなのに、そこだけ「杯杯児」というふうにソリ舌が現れる方言(雲南方言など)があります。これは恐らく標準語からこういう語構成法を受けたのではないかと思います。

5. 方言と言語外的要因の関係：GIS の利用

中井幸比古:

大西先生のご発表で、一世帯あたり的人数と父親の尊敬語の関係という話に興味をもちました。そこで一世帯あたり的人数が 1985 年の国勢調査に基づいて出されています。方言と関係がある

のは、このような古いデータだろうと思うのですが、電子化されたデータで利用できるものはどうしても新しいものになりますね。

大西拓一郎：

1985 年を選んだのは調査当時の状況ということで、実は電子化されていません。出版されたものを我々が全部入力したのです。電子化されているのはつい最近のものだけで、過去の資料の電子化が大変ですね。

曹志耘：

大西先生に質問があります。日本の言語地理学の発展は、第一段階が解釈地図で、これは欧米の影響を受けたもの。第二段階が資料地図、そして第三段階が電子化ということで、現在は電子化の段階にあるわけですが、そこで教えていただきたいことが二つあります。一つは、『日本言語地図』と『方言文法全国地図』で、なぜ解釈地図から資料地図に変化したのか？二つ目は、地理情報システム(GIS)に、非言語的な要因は含まれているのでしょうか？地理、地形、交通などの要素のほかにも、言語変化に影響を与える非言語的要因はたくさんあります。歴史、社会、民俗、文化などです。それらを GIS に含めることはできますか？

大西拓一郎：

解釈地図から資料地図に転換したのは、解釈地図において、一度言語データを構成してしまうと、元に戻れなくなってしまうということと関係しています。これはネガティブに受け止めないでいただきたいのですが、中国の今回の言語地図を見ましても、いくつかの形式が一つのインデックスとして統合されています。一旦統合してしまったデータは、もし元のデータがなくなってしまうと、元に戻すことができません。『日本言語地図』(LAJ)ではかなりそれが行われていて、しかも当時電算化はまったく念頭になかったもので、元に戻すという作業が難しい状態なのです。その反省の上で、『方言文法全国地図』(GAJ)ではなるべく恣意的な操作はしないように、基本的なルールをしっかりと作って、そのルールの上でインデックスを作っていくという作業を行う、こういう流れの中で、解釈地図から資料地図への転換が行なわれたと理解していただきたいと思います。恐らく LAJ の当時は、言語地図の作成者の感性によって作られしうことに対する抵抗感があまりなかったのではないかと想像します。ある先生が作ってしまうと、後の人が別の観点でデータにもう一度光を当てて、考えを直すことを拒否してしまう、そういう危険性がある。GAJ ではそういうことをなるべく避けたいということでやりかたを改めたのです。

曹先生の二つ目の質問ですが、先程の新田先生の話の中で、特定の地域に新しい形式が発生することがある。確かに GAJ を見ていると、新しく発生した形式がたくさん見られます。そういうところに注目して、どういう地域で新しい形式が発生して、広がっていくのかということと、人口関係のデータと合わせて見てみたのです。面白いのは、西日本と東日本で地域のあり方に違いがあるようで、西日本は非常に分かりやすいです。都市部の周辺的なところで、新しい形式が発生しています。だから、完全に都市的なところが発生源になるのではなくて、完全に都市的な所は案外新しい形式に抑制的な機能が働くのではないかと思います。むしろ都市周辺部で自然な発生が

起きる。これが面白いし、分かりやすいですね。ところが、東日本は少し違うようです。発生源を見ていくと、まず一つ分かるのは、東日本では、案外都市的な地域が西日本にくらべると少ない。大都市というのは、基本的に西日本に非常に発達しているのです。それから、新形式が発生している所を、国勢調査のデータをベースに考えると、年齢層でいえば 15 歳から 60 歳ぐらいまで、つまり社会を支える年代の割合が高い所で発生しています。これはどういうことかという、実はあまり地理的な都市性に関係なく、働き手が多い所で新しい形が広がっていくのだらうと思います。

曹志耘：

私の質問は、これらの要素が全て GIS に含まれるかどうかという点です。今おっしゃった件もそうですけれども、GIS は言語地理学が新生に向かう道筋を開いてくれるでしょうか？

大西拓一郎：

基本的に GIS は数量的なデータですので強いですね。いろんなデータがあり、目的があれば、それらを様々に関係づけて使いやすくなっています。それらを盛り込んで使っていきたいと思っています。反対にさきほども言われましたけど、GIS は言語地図のように数量的でなくて、むしろカテゴリカルなデータについては案外苦手だということが分かっています。言語と関係しそうなデータを見てみると、今のところ、男女比とか、誕生別人口などがあります。

6. 方言の歴史

中井幸比古：

新田先生のご発表で、形容詞「青い・赤い」はアーオイ・アーカイがあるが、名詞「青・赤」はアオ・アカしかないという御指摘でした。御説を推し進めるならば、これらの例は、古くは名詞のほうにも対立があったのが形容詞にだけ残ったものということになると思います。そうだとすれば、形容詞のほうに古形が残りやすかった理由が考えられるでしょうか。

新田哲夫：

形容詞の長音ですけど、確かにおっしゃった通り、それに対応する名詞、あるいは形容詞語幹から作られたような名詞、例えば「長生き」とか「高下駄」とかには長音が出てこない、これはなぜか、ちょっと分かりません。私は日本語の古い特徴と思っていますが、或いはもっと根が深いものかもしれません。例えば、古い朝鮮語で長音を含むものはたくさんありますね。無論、当時の朝鮮語がどうだったかがわからないので軽々には言えませんが、そういうことも想像しています。

胡士雲(四天王寺国際仏教大学)：

大西先生ご紹介くださった地図から、日本の場合、東西方言の対立がかなりはっきりしていると思いますが、このような差異が形成された歴史的、或いは地理的背景があるのでしょうか？

大西拓一郎：

私はあると思います。境界線の位置は、山岳地帯でもかなりはっきりしています。ところが東的な形が境界線の西にポツポツと出てきます。もし都市的な地域だったら、これは共通語化でしょう。し

かし非常に人口密度が低い谷間の奥など、例えば岐阜県にあります。過去に出版された地元の研究者の調査記録などを合わせて見てみると、境界線が少しずつ西から東へ動いていると思われます。つまり岐阜県の辺鄙な所に東の形が少し残っている、これはまだ定説になっているわけではありませんが、そのような解釈もできるのではないかと考えています。